

## 牧師室から (2021.5.30)

東京神学大学で学んでいた頃に、日本の方に韓国語を教えたことがある。書道をされる方で、今も交流が続いている。彼女の作品が中国の博物館に永久保存されることになっているようで、展示会は勿論、個展を何回も開いた実力者であるが、素朴で優しい人柄である。

書道を学ぶときに、韓国語の文献を読む必要があつて、それをきっかけに韓国語を学び始めたようである。私に出会ったときは、既に韓国語の文法は勿論、会話もある程度できる状態であつたので、教える側の私にとってはとても楽であつた。

聖書の他、「星の王子さま」や韓国の小説と一緒に読みながら、わたし自身も会話を楽しんでた。勉強後には、いつも持ってきてくださった美味しいクッキーやケーキと一緒に紅茶を飲みながら、彼女もクリスチャンであつたので、お互いの教会生活や個人的なこと、あるいは音楽やいろいろな話題についての話し合いをした。それは心身共に余裕がない留学生であつた私には、豊かなとても有り難い時間であつた。

そのような会話の中で、彼女は体が弱い上に老いも重なつたせいか、体のあちが痛い、こっちが痛いと言ったりした。何よりも服や身に掛けるスカーフも重いものはだめで、靴選びも結構気にして、食にも気をつけていることなどを言っていた。そのような話を聞きながら、当時のわたしはそこまで気になるものかな、と理解できない気持ちで、優しい人だがとても神経質な方だと彼女に対して思っていた。

しかしこの頃の私は、肩にかけるバッグが重いと辛くなってなるべく軽くしようとす。また、服が重かったり、きつく感じられるとすぐ避けてしまうし、靴も楽なものばかりを履いている。いつの間にか、食べ物にもうるさくなって、鈴木牧師を困らせることもある。そのような自分を見ながら、彼女のことを思い出した。この間の電話でそのようなわたしの話をしたら、彼女は大笑い、長年会っていないが変わらぬ彼女の声にホッとした。

コリントの信徒たちに宛てられた手紙の中で「・・・たとえわたしたちの『外なる人』は衰えていくとしても、わたしたちの『内なる人』は日々新たにされていきます。(II コリント 4:16.)」と使徒パウロが言ったように、弱っていく自分の体に負けず、かえって新しく強められていく信仰が与えられていることに感謝して歩んでいきたい。

(鈴木善姫牧師)